

平成22年 5月 17日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：19320069
研究課題名（和文） 国内地域間コミュニケーション・ギャップの研究—関西方言と他方言の対照研究—
研究課題名（英文） Studies on communication-gap between regions in Japan: Contrastive research between Kansai dialect and the other dialects

研究代表者

尾崎 喜光 (OZAKI YOSHIMITSU)
国立国語研究所・時空間変異研究系・准教授
研究者番号：10204190

研究代表者の専門分野：社会言語学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：方言

1. 研究計画の概要

本研究は、言語や言語使用が他の地域と異なる面が多いと言われる関西方言に焦点をあて、首都圏および関西周辺のおもだった地域での言語使用と比較対照し、言語使用や言語意識に関する地域差や、その違いから生じうる地域間コミュニケーション・ギャップの実態を明らかにすることを目的とする。

この目的のために、面接調査と多人数アンケート調査により、次の2点を明らかにする。

- (1) 特定の表現や言語行動を、それぞれの地域では、誰がどのような状況で用いる傾向があるか。
- (2) 関西的な言語行動や言葉の用法に接した場合、どのように受け止める傾向があるか。

2. 研究の進捗状況

インタビューの回答者は移住者であるが、言葉について内省力が高くさまざまな情報が得られることが期待できる新聞記者やアナウンサー等の職種の人々、言葉についての内省力が高い日本語コース専攻の大学生、地元の人と接することの多い主婦等をおもな対象者とした。3年間で合計185人から回答を得た。「出身地→移住先」の形式により内訳を示すと次のとおりである。

関西→首都圏 : 28人
関西→名古屋市 : 35人
関西→広島市 : 26人
関西→福岡市 : 33人
名古屋市→関西 : 10人
広島市→関西 : 10人
福岡市→関西 : 21人
首都圏→関西 : 22人

一方、アンケート調査については、2年間にわたり東京都(区部)・名古屋市・大阪市・広島市・福岡市で実施した。回答者は無作為に選ばれた20歳～79歳の市民各200人(計1,000人)である。実査は民間の調査会社に委託した。

3. 現在までの達成度

本研究は、大量のデータを収集しそれを分析する方法を選択した。そのため、最初の3年間はデータ収集そのものに多くの時間と労力と研究経費を投入した。研究成果は最終年度である4年次の分析を経て生み出す予定である。研究成果そのものはまだ出ていないが、それは本研究の性格から予定されていたことであり、調査そのものは3年次でほぼ予定どおり終了した。全体として現在まで予定どおり達成したと考える。

4. 今後の研究の推進方策

最終年度は、インタビュー調査の文字化資料およびアンケート調査の集計資料を分析し、研究成果報告書として研究成果をまとめる。その過程で、関連学会等において口頭発表を行い、分析についての意見を広く求め、分析の向上に資する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

上記「3」に記した理由から、現時点での研究成果はまだない。

[雑誌論文] (計0件)

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕